

フォートリエーアンフォルメルとその知的環境

芳賀 徹

ジャン・フォートリエはなかなか難しい画家ですが、この日曜日にこんなにたくさんの方々がお集まりくださいまして、さすが豊田と感心いたしました。

ジャン・フォートリエが1959年の11月に日本にやって来て、南画廊で個展をおこなった時に、わたしは通訳を務めておりました。わたしはその前の1955-57年にかけて、フランスに政府給費留学生としてパリに留学しておりました。当時わたしが住んでいたのは、パリの外れに今もありますけれども、大学都市 (Cité Universitaire) というところでした。そこの薩摩治良八氏が寄付した日本館の3階に住んでおりました。上の階には画家の今井俊満がいて、わたしと同じ階には堂本尚郎がおりました。彼らと親しく付き合うようになり、いつのまにか今井や堂本の絵がとてもおもしろくなりまして、彼らに誘われるようにしてスタドラー画廊に出入りするようになりました。留学二年目にはパリ大学での比較文学の勉強よりも、毎日のようにスタドラー画廊に行っていたように憶えています。スタドラーに行って、そこに出入りしているいろいろな画家たち、そこで参謀総長をしていた批評家のミシェル・タピエ、それからスタドラー夫妻、そういうひとたちと話をするほうがはるかにおもしろくなった。あのころスタドラーに出入りしていたアンフォルメル系の画家たちはほんとうにおもしろかった。絵描きというのはこんなに痛快な人間なのかと、わたしはパリに留学して画家たちと直接に触れ合うことによってはじめて知りました。こんなにおもしろい人間ならば、画家たちがこの世界に存在する理由があると確信しました。普通の常識人とはまるで違う生き方をされていて、肉体はソバージュといいますが、野生人で、そのくせ頭脳には非常な鋭敏なインテリジェンスを宿している。そして、一晩か二晩で、あっと驚くような美しい、素晴らしい作品を見せてくれる。ほんとうに不思議な存在でした。そのひとたちに惹かれて、わたしははじめて絵というものが好きになりました。アンフォルメルによって、わたしの美術への偏愛が刷り込まれたようです。それ以前にも日本でいろいろ展覧会を見ていたはずですが、上野で日展や二科会を見たりとか、その程度でした。

生で画家たちとつきあって、画家たちが制作しているところをときどき覗いたり、助手役をしたりもしました。その画家たちの展覧会のオープニングには、かならず大勢の愛好家やコレクターや友人が集まって、にぎやかに談笑する。作品が展示されている画廊の中で、カナベを食べたり、ビールやワインを飲んだりして、華やかに盛り上がる。もちろん煙草も吸います。作品の前でね。そのヴェルニサージュという画廊の中のパーティが終わると、「さあ行こう」ということで、当日の主人公が先頭に立ってモンパルナスのクーポールに行って、閉店の午前2時まで大きなテーブルを囲んで、ワインを飲んだり、コーヒーを飲んだり、料理を食べたりしながら、わいわいと話をするわけです。さまざまな国籍の画家たちがいる。それはそれはいい勉強になりました。ソルボンヌで勉強するよりは、ああいう生きた、知的野蠻人たちと話をすることが若い頃のわたしにはとても意味があったように思います。そういうなかにも、ジャン・フォートリエはときどきおりました。



撮影：青木兼治

この論考は、2014年8月16日の豊田市美術館での講演原稿を元にし、大幅な修正を加えられたものである。紙幅の都合で、講演内容を大幅に削らなくてはならなかったことを、講演者の芳賀氏にお詫びしなくてはならない。本文で触れられている作家についても、また本文中には登場しないアルベルト・ブツリ、セルバン、タピエス、マーク・トビー、ジョアン・ミッチェル、デイヴィッド・スミス、エチエンヌ・マルタン、そして日本の具体の面々についてもカラフルなエピソードを交えた作品解説が当日の講演で紹介されたことをここに記しておく。また、芳賀氏のアンフォルメルに関する回想的な文章としては多くが同氏著『藝術の国日本—画文交響』角川学芸出版、2010年に収められている（「別の藝術—アンフォルメルの誕生」「アンフォルメルの青春」「勅使河原書風」「追憶のサム・フランシス」「サムライ・イマイの出陣」等）。

フォートリエは1898年の生まれですから、わたしがパリに行った時には60歳近くになっていましたので、「メートル」つまり大家フォートリエでした。ですから、そうしょっちゅう騒いでいるわけではありません。ときどき現れると「あれがムッシュ・フォートリエだ」と、みんな一種畏敬の念を持って接しておりました。

やがて1959年の秋に留学から帰ってまいりまして、そこでまた、アンフォルメル画家たちが次々と来日します。今井を先頭に、ミシェル・タビエやジョルジュ・マチウ、サム・フランシスなどがやって来て、いわゆるアンフォルメル旋風が日本に巻き起こります。その旋風がまだぐるぐると吹き続けている1959年11月、フォートリエが南画廊で個展をすることになりました。南画廊は開かれてまだ1年くらいの新しい画廊で、志水楠男さんという方が献身的に画廊を経営しておりました。この画廊は当時まだごく珍しかったヨーロッパやアメリカの、それから日本の前衛的なものばかりを扱っていました。とてもいい画廊でした。そこに行くところをまたおもしろくて、大学院生に戻ったわたしはしょっちゅう通っていました。志水さんも喜んで、ソファに座って3時間も4時間も喋っていると、そこに岡本太郎がやってきたり、東野芳明や大岡信や中原佑介がやってきたり、絵描きたちが出入りしていた。そういうことがありまして、フォートリエがやって来たときには、志水さんから「じゃあ、あんた通訳を手伝ってくれ」と言われたんです。

当時の写真(図1)にはフォートリエ自身が展示を吟味しているところが写っています。もう一枚の(図2)、左の背の高いのがミシェル・タビエ、その隣の黒いネクタイがフォートリエ、その右でちょっと首を傾げているのが当時28歳のわたし、いまから50年以上前のことです。わたしの隣の髪の薄い人がジュゼッペ・ウングレティ。イタリアの大詩人です。そのとなりで、オーバーを着ているのがジャン・ポーラン、20世紀フランスを代表する批評家であり、詩人でありました。フォートリエが日本に来たときに、このふたりを連れてきたんです。旅費は彼が払ったのかどうか、聞いておけばよかったですね。ウングレティやポーランが払うはずはないので、フォートリエが払ったんじゃないでしょうか。とにかく実に豪華な顔ぶれでした。この写真(図2)でジャン・ポーランの後ろにあるのは、あるいは現在展示されている《雨》(図3)かもしれません。南画廊の志水さんははじめからこの《雨》を大原美術館の大原総一郎さんに買わせるつもりで、ちゃんと工夫してあった。初日に大原さんがみえたら、わたしがそばに行って「大原さん、これがいいですよ」とささやいて、それで買ってもらったのでした(笑)。いま見てもやっぱりいい絵ですね。買わせてよかった(笑)。いくらで買ってもらったかよく覚えていないんですが、とにかく、大原さんが買ってくれたことによって、フォートリエのこの展覧会の大成功が決まったんです。それによって南画廊は経済的に保証されて、すべての支払いをすることができたのでしょう。この南画廊は日本橋の通りから少し入ったところの小さい画廊で、二階がぎしぎしと今にも落ちそうだった。それがもっと広いところに移ることもできた。南画廊の歴史においてフォートリエの展覧会は最大の事件だった。わ



図1 出典：『芸術新潮』1960年1月、68頁



図2 出典：『芸術新潮』1960年1月、69頁

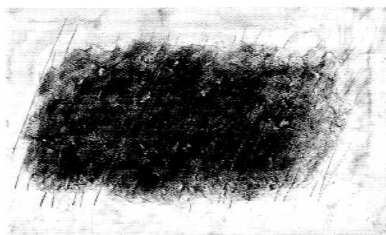


図3 ジャン・フォートリエ《雨》1959年
グワッシュ、石膏、紙(カンヴァスで裏打ち)
80.8×129.7cm 大原美術館
出典：『ジャン・フォートリエ』展カタログ、
2014年、東京新聞、148頁、作品番号111

